

浮世絵の美

その二十八

日本文藝家協会会員 各務 章

今号では、鈴木春信（一七二四頃～一七七〇年）の「風流江戸八景」について紹介したい。例によって、「浮世絵春画名品集成」で特集された錦絵秘画帖の春信の部からの引用である。

いつもの事だがこの道の解説者であるリチャード・レイン氏の説明を借りる事にする。河出書房新書の発行も回を重ねているが、何よりも原画がカラーで紹介され、その他の作品についても説明用として縮小版（モノクロ）で多数配置されているのが参考になる。

春信はその絶頂期に惜しくも四十六歳で急逝していて、多彩な才能が十分に発表されなかったのが残念である。しかし彼の革新的なアイデアと感性豊かな美意識は、江戸時代では稀に見る品性の高い

い芸術作品として残されていて、その功績は大きい。

春信の特徴は、その時代の美人画はその殆んどが吉原の遊女をモデルにしているのが通例だが、春信は町中に生活している庶民の娘で、若い少女を紹介したので有名である。

現代の社会風潮として、若い女性への性的関心が大きい事が、しばしば話題になる。ロリコンとか女子学生への援助交際とか、必ずしも、ほめられた事ではないがニュースになることが多い。このような事が既に江戸時代にもあった事を浮世絵は示している。吉原の遊女より「となりの人」がある。



娘、それも大衆が好む美少女を画いて、当時のプロマイド的に流行させたのが鈴木春信

だったのである。有名な話として「江戸三美人」がある。



「お仙」(江戸北部谷中の笠森稲荷にあるかぎ屋の娘)。「お芳」(お藤)(元柳屋の娘)。「お芳」

(つた屋の娘)。いずれも江戸浅草の商店の娘で美少女との評判があり、PRの手段としてこれらの版画が大きな役割を果たしたのである。

又春信は美少女だけでなく、美男子も描いているのが他にはない特徴でもある。

当時の江戸では小型の暦(年賀状)が作られていたとの事である。この絵暦は一七六四(明和元)年頃から裕福な好事家、俳人、武士達が趣味から各グループごとに作らせたようである。浮世絵への興味もこんな所から広がったとの事である。当時の暦は、毎月を大の月(三十日)と小の月(二十九日)で構成されていて、その数字を絵柄の中に控え目に組み入れる事で評判を呼んでいる。又芸術的な作品がその技術と共に発展し、画題の質を競う鑑賞会が、年間を通し

六
て定期的に開かれたと説明されている。

趣味と芸術鑑賞にゆとりある庶民の生活があったのである。特に春信は、秀れたアイデアと技法によって一七六五年、六六年の二年間にこの種の暦を大量に作成し好評を得た事が残されている。

二例を紹介しよう。その一図は「雪の窓辺で恋文を読む花魁」(中版錦絵、絵暦一七六五年)。愛らしい花魁が巻紙を両手で広げて恋文を読んでいる姿。その恋文にその年の暦が書かれている。窓の外には植木の枝に雪がつもっていて窓下の庭も白い雪景色である。

もう一図は「水売りの少年」(中版錦絵、絵暦・一七六五年)。江戸の町で少年が天秤棒を肩にかついで両方の荷に水とお茶を入れて売り歩いている可愛い姿である。江戸の名水と言われた井戸水をフタをした桶に入れてある。片方には桶の上に茶道具が置かれていて、赤い禪に祭りの法被を着ていて、頭には暑さしのぎに麦わらの笠をかぶっている。本も

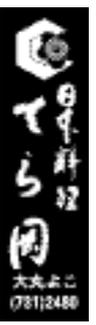
のを見ないと判らないが説明によると単純な少年の構図の背景に、江戸時代の絵には例を見ないピンク一色を描いてユニークに引き締めている。

これが春信の個性的才能として高い評価を得たとされる。尚この茶道具の横に水売りの屋号が木の板で吊られているが、この屋号の二文字の中に曆の大の月の数字がかくされて描かれていると言うから、随分と凝った手法である。

この二図を見ても春信の才能のすばらしさが判ると私も納得している。

さて春信の作品には他に「風流座敷八景」がある。そして更に庶民の要望に応えるものとして「風流艶色まねへもん」がある。現代でも、時には犯罪として罰を与えられるもので男性の欲求の中にある覗き見を素材にした春画を描いている。

このシリーズの場合は、覗き見の大好きな男の冒険譚で、



当時の恋の女神のお仙とお藤に祈願したおかげで、覗き見するのには便利なように自分の体を小さくする妙薬を与えられ豆男にさせられる。そして

大胆にも二人の密会の場所のすぐ近くまで、本人たちに判らないように行って観察する、という画面である。

この設定は既に以前からあったが、春信はこの絵を美術的に高級な作品に描いたという点がユニークで、この「まねへもん」シリーズを成功させたと言ってよい。

「邪魔された逢引」ではふとんの端からまねへもんが見ている図だが、好色な男がお楽しみ最中に妊娠中の女房に見つけられて困った姿を描いていて笑いを誘う。明るくて男への戒めにもなっているようだ。説明が多すぎたが、当初の



題名になっている。「風流江戸八景」の秀れた春画を紹介しよう。いくつかの図柄があるが、私の好きな画面をお見せしたい。

である。周囲は暗い。しかし、右側にはそば屋が注文を受けて、箱台を下に置いてそばを作っている。顔は恋人二人の方を見ているが、別に驚いた風でもなくやさしい顔つきである。いつもの風景だからどうぞ、と言った図である。

そば屋の荷台に「一八」と書かれている。一杯の値段が八文だと示されていて面白い。二世代くらい後の広重の浮世絵の時には「一六文」に値上げされていた。

しかし現在に比べ物価の上昇もゆるやかだったらしい、との説明があるがはたしてどうであろうか。

もう一枚の春画を紹介しよう。

立った子供が左側に画かれている。手に小さな太鼓とバチを持って左側の姉さんと獅子舞の男性とが着物の裾をめぐって交合しているのを見ている図である。

子供の姿が無邪気で明るい顔つきである。「あれ姉さん何をしているのだ」と言わんばかりの表情が実にリアルで見

る者の心をなごませる。獅子舞の頭をかぶった男の顔は見えないが、子供と向き合った姉さんの顔がとても優しくそれで上品なのがよい。

座敷の描き方も大らかで上敷きの畳の間に広い濡れ縁の廊下。その先は庭で渡り石が二つ。すだれがあり、植木の鉢が真ん中をしめくくっている。子供の着物も当時の風俗だろうか。足もとに小さなダルマさんに玩具が二つ。二人の男女の着物の柄と模様も上品である。めくれた着物からぞいた二人の白い太ももの間に陰毛が黒く小さなタワシのように描かれているのも面白い。

春信の春画に描かれる風景と家具調度。又川遊びの舟の内部と男女の交わりの情景。又座敷の外に置かれた水鉢の中の金魚の泳いでいる風景等、江戸庶民の日常生活の様子がゆったりとした上品さの中で写し出されているのに我々は心の安らぎを覚えるのではないだろうか。

七 つづく